

幼なじみと腐れ縁

hichakko

幼なじみ、と言えは聞こえはいいが、私たちの場合は絶対腐れ縁、ってやつだ。
思えば、私たちは保育園から中学校までずーっと同じ道を歩まされてきた。そうなれば当然、高校も同じじゃないはずがない。
私が一年生、あいつが三年生。
もう一年、私が生まれるのが遅ければ、一年間も顔を合わせずに済んだというのに。
何の因果か、一年間だけ同じ時期に同じ学校に通うはめになったおかげで、私たちの縁は腐っても切れずにまだ繋がりに続けている。

「行ってきまーす！」

高校に入学して早一週間。
徐々に高校での生活にも慣れ始めた頃、私のタイムスケジュールもそれに合わせて調整されつつあった。
だいたいこの時間に家を出れば、予鈴前には教室に着いているということが分かってくと、私はそれに間に合うギリギリの時間まで行動しないことにしている。
なぜなら朝は一分一秒でも多く寝ていたい派だからだ。
しかし、私が家を飛び出すのとほぼ同時に、隣の家扉も開き、中から見覚えのある男が姿を現した瞬間、私の顔は引きつった。
大欠伸をしながらくたびれたショルダーバックを肩に担いだその男は、私と目が合うと、にやりと唇の端を吊り上げる。

「よう」

「……………」

私はすみやかに無視を決め込んで、車庫に置いてあったMY自転車にまたがった。
そしてすぐさまその場を走り去ろうとしたものの、いつもより重いペダルの感触に眉根を寄せる。
嫌～な予感がして後ろを振り返ると、案の定後ろの荷台には奴が腰を下ろしていた。

「……ちょっと！」

「ほら早く行けよ。俺まで遅刻するだろ？」

全く降りる気配もなく先を急がせる横柄な態度に、私はものすごくカチンときたが、こいつを蹴り落としている時間の余裕などこれっぽっちもないことは自分がよく分かっていた。
そんなことをしていたら、私が遅刻する。
並大抵のことでは動じないこいつのしぶとさは、夏の悪魔より性質が悪い。くそ！いつか駆除してやる！

「私の身体に指一本でも触れたら、蹴り落とすから」

「お前の色気のない身体に触るほど俺は女に困ってねえよ」

「……あっそ！」

相変わらずの憎まれ口を叩き合いながら、私はいつもより重いペダルを一気に踏み込む。
普通、逆じゃないの！？

男女の自転車二人乗りといったら、男が運転する側になるものだ。

それなのに女の私がなんで男のこいつを乗せて、運転しなければならないのだろう。なんだかも
のすごく理不尽。

しかし、そんな文句を言っている暇はない。

遅刻しないギリギリの時間に家を出ているのだ、ことは一刻を争う。

後で絶対乗車料払わせてやる！

体育会系の意地を見せて、猛然とペダルをこぎ続けたおかげで、校門に辿り着いたのは予鈴がな
る五分前のことだった。

人間頑張れば、意外と何とかなるものだ……。

「じゃあな。お疲れさん」

着いた早々さっさと教室に向かおうとする奴の制服を慌てて引っ掴む。逃がしてなるものか！

「ちょっと待ちなさいよ！」

「……ああ？ なんだよこの手は」

差し出した手のひらをぺちぺちと叩かれる。

「乗車料、払いなさいよ！」

「水臭いこと言うなよ。俺とお前の仲だろ？」

「あんたはただの幼なじみであってあくまで他人！ ここまで運んであげたんだから、乗車料く
らい払うのは当然でしょう！？」

「しょうがねえな…」

奴は観念したように私の手のひらにそっと自分の手を重ねると、何を思ったのか突然私の身体
を引っ張り寄せる。

「あっ」と思う暇もなく二人の間の距離が急激縮まり、身をかがめた奴の唇が私のおでこをかす
めた。

……奴の唇が私のおでこをかすめた。

奴の唇が、私のおでこを――

はあああああああ！？

ちょ、ちょっとこいつ今何した！？ 私に何してくれやがった！？

不可思議な柔らかな感触が残るおでこを抑え、私は猛烈な勢いで後ずさりする。

「払ったぞ、乗車料。じゃあまた明日な」

意地の悪い顔で最後にはくそ笑んだあいつの姿を呆然と見送り、私は自分の心拍数がこれまでに
なく超ハイペースになっているのを感じた。

なんだろう。心なしか顔も熱いし、息も苦しい。

あいつはただの幼なじみで、腐れ縁で、それ以上でも以下でもないのに。

——今さっき突然生まれたこの気持ちは、何だ。